

朝 と 夜

ゝ
女
の
子
と
し
て
イ
か
さ
れ
て
ゝ



四限を終えた昼休み。食事を終えた僕の心は複雑だった。

「朝田くん、こういうの、好きだったり？」

ただタイミングが悪かった。時計を見ようと顔ごと向けた視線の先で、秘密の自分が微笑んでいた。

僕にとっては眼前の席で、夜野ミサキが触れるスマートフォン画面には、生物学的にあり得ない色と量で、ついでに重力も無視した形状の髪を携えた少女がいた。見た目はさておき、機能性も実用性も着用の簡易性すら投げ捨てられた衣服も、自然界にも人間社会にも受け入れられることのないだろう鮮やかなパステルな配色。皮のブーツは肌を締め付けるようなタイトなソックスと一体化したような構造で、膝を隠して太股にまで至っている。スカートとの狭間に見える白く細い太股が眩しい。あ、これは光源が強すぎて白飛びしてるだけだ。タイツを穿いていたとは言え、実際はもつと普通の肌色だったはず。

思考に思考を重ね続けて、現実逃避じみた心境の整理。心拍数が上がるより先に、理性の手の平で心臓を握りつぶすように冷静さを保つ。バレてない、バレてない。絶対にまだバレてな

い。

化粧の力は偉大なり。完成度には違いがあれど、素質というか素材次第で、人間はだいたい美女が美少女になれる。

一重の瞼は二重になるし、目尻は濃いめに描いたアイラインによって延長される。一般的に化粧と違い、コスプレに置ける化粧は大改造だ。素顔がどれほど美しくなろうと、その原型をかなぐり捨てて、求める形を目指して造る。瞳は大きく、睫毛も長く。形を変えて描いてみれば、男でだって少女になれる。

いや、たぶん女性でも似たものだろう。化粧をする前と後で、人間の顔は整形手術にも酷似した変化を遂げるものだ。

だからバレない、バレてない。

写真が僕だとバレてはいない。

信じて信じて焦りを殺し、僕は静かに「何が？」と返す。忘れていたけど、時計を見ようとしていたんだった。

「こういうの」と問う夜野の声に促されるまでもなく、僕の視線はスマホの少女から離れない離せない。いや少女じゃなくて男子なんだけど。

「好きだったたり？」

事前の言葉をそのままなぞり、夜野の声は僕の首を締め付ける。否定の言葉は中途半端にさえ開かない口腔こうくわうの中でぐもって、渴いた声帯が張り付いた。

元々それは、誰かに見せるための趣味ではなかった。独りひとりで着て、独りで撮り、独りで眺めて悦えつに浸る。着たまま何かをするのではなく、ただ単純な変身願望の現れに過ぎなかった。

仮に僕が長身で、鍛えて筋肉が付けられるような体力があれば、格好良い男のキャラクターになりたかった。派手な鎧よろいよりシックな服で、剣は構えず鞘しやの中。鋭い瞳を斜に流し、ただ付むだけでも様になる。そんな男に憧れるあこがるのは、この世全ての青年男子に当てはまるだろう。なお、学名は邪気眼。

しかし自分は童顔で、「前に習え」で前に習った経験のない低身長。今でこそ落ち着いたものの、以前は小児喘息で長距離走もままならなかった自分の体力では、筋肉どころか脂肪も付かず。「何かキャラクターを演じたい」という願望を妥協たきようし、「では自分にできるキャラクターは何だろう」と思考を転換してみれば、辿り着いたのが女の子だった。

始めた頃はこういうわけか、それを女装とは思わなかった。女性が男性キャラクターのコスプレをするのと同じ括りくくりで、僕もただ女性キャラクターのコスプレをしているだけだった。ただ黙々と自分の部屋で、何の生産性もなければ、思い返して意味すら見当たらない孤独な趣味だった。

僕が「この趣味だけは隠し通さねば」と気付いたのは、九歳も年上の兄が福引きか何かで当

てたカメラと三脚を貰い、自分で自分を写してみたときだ。鏡で見るよりずっと客観的に、女の子になった自身の姿をまじまじと観察していると、不意に不思議な高揚感と気恥ずかしさが襲ってきて、僕はようやく女装趣味の真実を知った。

深い意味もなかった変身願望が形になって、写真という記録に残された瞬間、僕は確かに自分ではない別人となった。自分自身を愛おしいとさえ感じる奇妙な興奮状態で、自信過剰に息巻いた。誰かにも見てもらいたい。

結果も過程も曖昧に省くが、それはきっと本当に可愛い少女の写真だったのだろう。ブログもコミュニティサイトも使わず、活動報告も近況報告さえなく、ただ写真だけをアップロードする異色のコスプレイヤーが誕生して、気付けば知名度も上がっていた。気付いたのは今だけだ。

インターネット上に公開したのは自分自身だけれど、まさか巡り巡ってクラスメイトの目に映ると思ひもなかった。批評を聞くのが未恐ろしくて、ただ「好きなひとにだけこっそりと見てもらえばいい」と、投げっぱなしに放置していた結果がこれだ。

夜野が開くウェブサイトでは、どんな評価で僕の写真が挙げられているのか。もしかしたら男であると看破かんはされているかもしれないし、酷い一例としてネタにされているのかもしれない。そう考えるだけで目眩めまいさえる。

目眩ついでに体幹がブレて、椅子から落ちそうになるのをなんとか堪える。上半身が傾いたせいで、視線は夜野へ移動した。

普段はセミロングの後ろ髪を見るだけの夜野の顔は、悪く言っても美人の類。最低限の動きしかない表情筋のせいで男子一同の評価は微妙らしいが、まじまじと見れば意見が変わる。右目の泣き黒子に釣られて瞼を見ると、上向きの目尻が気に入らないのか、薄く引いたアイラインで垂れ目気味に改竄されていた。既視感と違和感。

夜野の瞳がスマホに戻って、そんな些細な仕草にですら僕は思考を中断される。ほんのわずかな空気の揺らぎに呼応して、癖のない黒髪がさらりと流れた。

僕は夜野の観察がやめられず、その口の端がわずかに持ち上がるのを見てしまう。再び彼女が僕を見て、微笑む仕草は殺人の凶器。

「朝田くん」と甘えるような声色で、僕は腹を括る覚悟の下準備。順次実行していく暇もなく、「あとでいろいろお話ししましょう」

「はい」も「いいえ」も言葉が出ずに、僕は無言で頷いた。

「やっぱり、すぐにわかったの？」

僕の疑問で、夜野は首を傾^{かし}げてみせる。それが否定の仕草だと気付くより先に、彼女は「さすがにアレは」と呟^{つぶや}いた。それはまるで独り言のようで、理不尽な現実^{じじつ}に毒を吐くような重たさがあつた。

なお隣を歩く夜野の背丈は僕より高い。僕にとってはその現実のほうが理不尽だ。

「なんていうか、ほら、好きなものって極限にまで観察したり、研究したりしたくなるでしょう？」

「いや、しすぎでは？」とは言わないでおく。一方的に振り回されるのは癪^{しゃく}なので、代わりに「例えば？」と罍^{くわい}を配置。

「カメラの設定とか、光源はどうしてるのかな、とか」

「メイクとか？」

「そうね」

「衣装は自作派？」

「買うほどお金に余裕はないし」

流れるように会話して、一瞬の隙で間合いを離す。予測していた裏拳^{うりこ}が耳を掠^{かす}めた。なんかちよっと漫画っぽくて感動。

臉周りのメイクの仕方で、なんとなく可能性の一部程度に考えていた夜野のコスプレ趣味が確定されて、僕が覚えるのは世にも奇妙な仲間意識。マイノリティの同胞意識は、蜘蛛くもの糸より割と強い。

「小癪こしゃくな」

頬ほおは化粧で誤魔化されても、耳の赤さは誤魔化せない。ついでに瞳も大きく揺れる。

「そんな台詞をリアルで聞くとは」

「それ以上調子に乗ったら、あなたのすべてを暴露して社会的に殺したあと、わたしの秘密をバラされる前に生物学的に殺す」

「なにそれ怖い」

「理解しなさい。持つべきものは共犯者だと」

「なにそれも怖い」

巨悪の要人でさえ再現に困るだろう獰猛どうもうな笑みで、夜野の口が牙を剥むく。僕の中では、この段階で上下関係がはつきりした。

「まあいいわ、それじゃあ予定は変更で。あなたの写真も見たいけど、それはまた今度で」

「僕もそろそろ吹っ切れた。どうする？ 撮るの？ 撮られるの？」

「撮るし、撮られる」

今度の笑みは朗らかに。事前に仕入れていた情報と異なり、夜野は意外と表情豊かで可愛らしい。前提として、あとは瞳の奥さえ笑っていれば。

「開き直って『あわせ』たいわ。例の写真のあのキヤラで、あなたが妹、わたしが姉で」

「どうでもいいけど、夜野の台詞がときどきすっごいリズムカルなのがラノベの影響っぽい」

「それ以上いけない。あなたのほうが」

「謝罪はするけどあえて言わせて？ 夜野とは今日初めて会話してるようなものだけど、ノリがいいし細かいネタが挟まってたりで凄く好き」

「親近感には同意するけど、わたしはあなたが嫌いになりそう」

眩しいくらいの笑顔で告げられ、僕は幻視の刃物で胸を刺された。比喻的な意味でなく、割と本気な殺気の意味で。

「音速で戻ってくるから、そっちはそっちで準備よろしく。逃げたら以下略」

制服の裾を翻し、夜野は横断歩道を引き返す。右折しかけた車を止めて、唯我独尊の歩みは止まず。そんな背中を眺めていると、夜野に振り回される覚悟がだんだん揺らいできた。

開き直ったはずだけど、些か決心は崩れかけ。心配性は元よりだけど、考えれば考えるほど、僕の呼吸が死んでいく。

溜息だけで息をし続け、気付いたときには家にいた。自撮りのためのスペース確保で、片付

ける以前に物が少ない自分の部屋で、僕は改めて項垂れた。

唯一の兄弟である兄はすでに家を出て独り暮らし、共働きの両親は繁忙期の真つ最中で、日曜日まで帰ってこない。それだけが辛うじて、不幸中の幸いだった。

沈んだ気分を払拭すべく、「さてと」と息巻き立ち上がる。夜野は準備をしておけと言ったけれど、どこまでやればいいのだろう。コスプレまで完璧に済ませているという意味にも捉えられるが、冷静に考えて、その状態で玄関先に迎え出るのは危険すぎる。

季節外れの衣類と、増えすぎた書物が収まる納戸を開けて、最奥を漁る。今はただ、覚悟はあとから付いてくると期待して夜野を待とう。

♂

「わたしもう死んでいい……」

部屋の扉が開くや否や、夜野は膝から頽れた。

状況を簡潔に説明すると、夜野の言う音速とやらが予想外に遅く、尿意もないのにトイレに行ったり、少しでも衣装が汚れないようシャワーを浴びたりといった牛歩戦術を以てしても時間有余りあったせいで、準備を通り越して心まで落ち着き、いつも通りに自室で撮影していた

次第である。

続いて「今、あなたの家の前よ」というメリーさんの電話に「鍵は開けといたから、入った
ら鍵かけといて」と返し、もはや自分の置かれていた状況を忘れていた僕は撮影を再開。ポ
ーズを決めたところでカメラのシャッターが降り、同じタイミングで扉が開いて夜野が死んだ。
だいたい以上。

「やばい、実際に目の前に動いてる破壊力はかなりやばい」

「あ、生きてた」

「今気付いたけど、朝田くんって声が中性的だから、見た目次第で完全に女の子になるのは卑
怯だと思う」

扉の枠に肩を凭^{もた}れ、フローリングに視線を落とす夜野の仕草は死に際の戦士。銃器の代替品^{だいたい}
として、手からスマホが零^{こぼ}れ落ちていた。

「一応訊^きくけど、大丈夫？ 霊柩車呼ぶ？」

「ツツコミを入れる時間も惜しいわ。余計な単語は省^{はぶ}いて、可能な限り感情を込めて、あと上
目遣いでもう一度お願い」

「霊柩車呼ぶ？」

「そこじゃない、けど、もうそこでもいいや……というか、脊髓反射に近い速度でその応答が

できる朝田くんを本気で尊敬できそう。そういえば朝田くんだった」

腑に落ちない立ち直り方をされつつ、夜野はよろめきながら立ち上がる。屹立きつりつして向かい合うと、身長差のせいで自然と僕が夜野を見上げる形になったが、思惑外れて夜野は意外と平然としていた。

最大で再び死ぬか、最低でも目を背けるそむくらいに可愛らしいリアクションはあるだろうと計算していたのに。

「ちよつと失礼」

見た限りでは平静に、森野の両手が僕へと伸びた。肩を掴まれ痛い引き寄せられて力強いな、前のめりになる僕を痛い両腕ほそくが捕捉とく苦しい痛い。

「柔らかーい、そして小さくて可愛い」

夜野の腕に抱き寄せられて、僕の口元は美姫びきの白い首筋に埋まった。予想外すぎる夜野の行為に心臓が跳ねるが、それより骨の耐久がやばい。

「あ、すごい良い匂いがある」

前言撤回。このひとは平然っぽく壊れています。

重力に逆らうウィッグ越しでもわかる夜野の頬と鼻筋の感触、そして熱い呼吸が、頭蓋ずがいを突き抜け脳を蒸し焼きにしてくる。

状況さえ適切だったら良かったのに。

タガが外れた夜の腕は強力で、彼女にとっては愛の抱擁ほうようでも、僕にとっては死の抱擁だ。

技名で言えばサバ折り。

口元が夜野の首筋に埋められているうえ、肋骨下部が豪腕によって圧迫されて酸素が足りない。腰を引き寄せられるように抱き締すくめられているので上半身が後ろに反って、肩が上がらないため呼吸も不能。眠気の微睡まどろみに落ちるときと違って、思考がそのままなのに瞼から力が抜けて視界が霞かすんでいくのは恐ろしいね。助けて。

「あら、いけない」

僕の祈りが通じた——とは思えないが、ふとサバ折りもとい抱擁の力が抜け落ちて、僕の身体も抜け落ちる。膝に力が入らずに、そのまま床に腰を付く僕を一瞥いちべつすらせず、夜野は廊下に投げ出してあった鞆を振り返る。

「わたしもすぐに準備するから、食べるのは間違えた抱きしめるのはまた後でね」

引き摺ずるように鞆を部屋へ放り込み、断ことわりもなく中身をベッドに広げていく夜野。台詞の間違い方がおかしいけど、気が付かなかったことにする。

僕を「朝田くん」と呼びつつも、おそらくすでに「朝田くん」と認識していない夜野は、躊躇ためらいもなく衣服を脱ぎ捨てベッドへと放る。そう言えば制服姿以外の夜野を初めて見たなあと感かん

慨^{がい}深く思う暇^{ひま}など微塵^{みじん}もなく、僕は慌^{あわ}てて這^はいずるように、部屋から廊下へ逃げ出した。

問一。すべてが終わって夜野が冷静さを取り戻した頃、「上下水色のお揃^{そろ}いでしたね」と告げた場合、僕は夜野にとって「脈あり」と言えるだろうか。

回答例。夜野の立場で考えるなら、脈の有無を問わず念のため留めを刺す。